

《テーマ》

川端康成が再発見した戦後の京都一文献とフィールドワークを照らし合わせて

《研究旅行要旨》

第2次大戦後、川端康成は京都を舞台とした作品を幾つも発表している。そして自身も戦後、頻りに京都へ滞在している。そこで川端が見た景色とは、どのようなものだったのか。川端の京都訪問を考えるために、次の2点の調査を実施する。

①川端と戦後京都に関する文献調査：川端はペンクラブの活動として1949年、1950年共に広島訪問の後に京都を訪れており、その経験は『虹いくたび』などの作品に書き綴る程に印象深かった。そのため、今回は川端の京都滞在日に沿って『京都新聞』の記事を調査する。

②川端と京都文化に関するフィールドワーク：京都を舞台とした作品に登場する寺院を巡り、より具体的な風景描写の考察へと繋げる。また、そこから得られる洞察を含め、舞台とされた寺院が取り上げられた意味、戦後京都との関連を探る。川端康成文学館では京都調査に先立ち、『日本ペンクラブ五十年史』等を調査する。全体としては、川端の京都への強い関心が戦後であった理由を中心に、川端が戦後京都を舞台にすることで描きたかったことを考えて調査することが、今回の研究旅行の目的である。



川端康成が再発見した戦後の京都
—文献とフィールドワークを照らし合わせて

18AR075 三芳つかさ

日程	訪問地
2月20日	大阪／川端康成文学館・大阪府立茨木高等学校(川端康成文学碑) 住吉大社(『反橋』文学碑)
2月21日	京都／高山寺・大徳寺 聚光院
2月22日	京都／化野念仏寺・本能寺
2月23日	京都／八坂神社・京都大学吉田南総合図書館・同志社大学図書館
2月24日	京都／光悦寺・龍谷大学大宮図書館
2月25日	京都／桂離宮

■序

今回の研究旅行の目的は、川端康成が戦後幾度と訪れた京都に注目し、『古都』を始めとする戦後の京都を舞台とした作品に即して、彼が再発見した戦後の京都の姿を明らかにすることである。1日目は大阪、2～6日目は京都を訪問し、大阪・京都の寺社、川端康成文学館、大学図書館3校で調査を行った。

■川端康成生誕の地・大阪

川端康成文学館では川端生誕の地を振り返り、加えて1967年3月刊行の『日本ペンクラブ30年史』、1987年11月刊行の『日本ペンクラブ50年史』、『川端文学への視界』第29、30号を調査する。1949年11月、川端は広島市の招きにより、豊島与志雄、小松治男らと共にペンクラブ代表として原爆被災地を訪問している。そうしたペンクラブの活動で広島・長崎訪問をしたのち京都へ赴いている¹から、今回ペンクラブに関する資料を調査するに至った。



図1 大阪府立茨城高等学校「以文会友」碑(2月20日著者撮影) 図2 大阪府立茨城高等学校 碑説明文(2月20日著者撮影)

¹ のちに「廣島の原子爆弾の惨害のあとを見聞した歸りに、古都の風光や古美術を見るのは、矛盾した自分であらうかと、……しかし、矛盾してゐるとは思へないし、やはり一人の私である。廣島と京都とは今日の日本の兩極端かもしれないし、そのやうな二つのものを私が同時に見てゐるわけであらうが、二つともなほよく見たいものである。」(川端康成「独影自命」『川端康成全集 第33巻』新潮社、1982.5、457頁)と語っている。

まず、大阪府立茨城高等学校へ、川端の「以文会友」²碑を見学を訪れた。事前に校内にあることを確認しておらず、撮影の許可を頂くために職員室へ向かった。廊下にいらっしゃった本管克江氏にその旨をお伝えしたところ、学校長の岡崎守夫氏へご挨拶をし、偶然にも調査のために来られていた川端研究者の宮崎尚子氏にお会いすることが出来た。昼食を共にし、現在の川端研究の動向や川端の京都への関心を中心にお話させて頂いた。その後、川端康成文学館・住吉神社の『反橋』文学碑³へ向かった。

ここで資料調査についてまとめると、川端らが広島市の招きで広島へ出向き、のち実際に見ることの重要性が報告され、ペンクラブ代表らと再び広島・長崎を訪れたことは記録されていたが、京都に関する事柄に関しては触れられていない。つまり、ペンクラブと京都訪問は直接的な関係はなかったといえる。

「私が五つの時に住吉神社の反橋を渡ったことがあるかないか、それが私には夢やゆめうつつや夢とわかぬかなであります。」 『反橋』

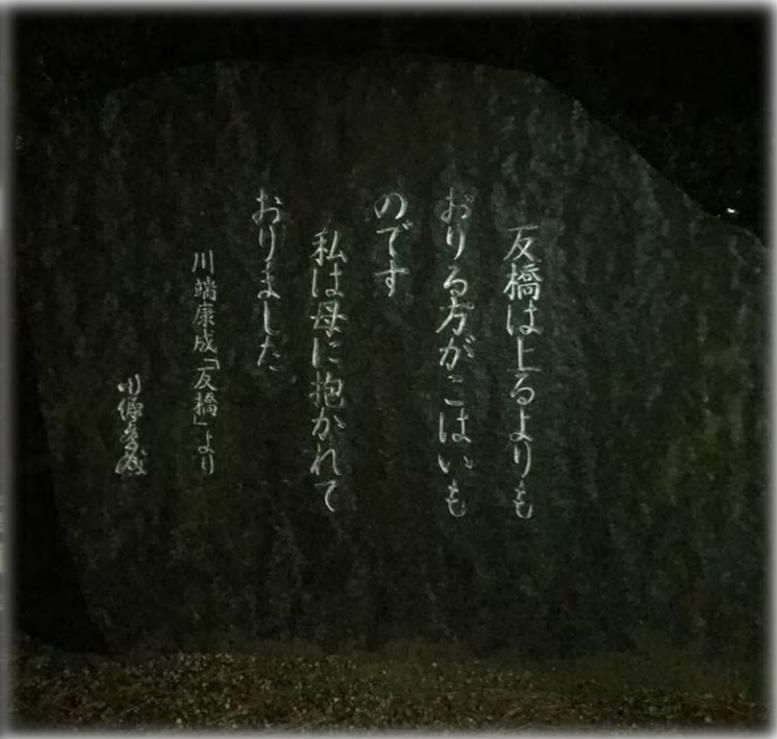


図3 住吉大社 反橋(2月20日著者撮影)

図4 住吉大社 『反橋』文学碑(2月20日著者撮影)

この住吉神社は『油』(1925年10月、「婦人之友」)でも描写されている。⁴

「ある年の正月、大阪の住吉神社に詣つて反橋を渡らうとすると、幼い時この反橋を渡ったことがあるやうな氣持がおぼろげに甦つて來た」 『油』

² 川端康成文学館では2017年2月11日~3月26日、テーマ展示「私のふるさと・茨木—川端康成と旧制茨木中学校—」が開催されており、「以文会友」文学碑についても紹介されていた。館内の映像ライブラリーでは常時「文学碑「以文会友」除幕式と茨木市名誉市民推挙式」の音声視聴が可能となっており、茨木市名誉市民推挙式ではノーベル文学賞受賞式での出来事をスピーチし、聴衆を笑わすといった川端のユーモラスな一面が窺える。

³ 2017年2月現在、大阪・住吉大社の反橋は21時までライトアップされている。

⁴ 川端は『油』に続いて再び晩年1948年『反橋』において住吉大社の反橋を描いており、両者とも肉親を巡る物語内で語られる。図3、図4から分かるように、滑り落ちる危険があるため、反橋は確かに降りの方が困難で、「こはいもので」あった。

■ 『古都』(1961): 高山寺



図5 高山寺 石水院(2月21日著者撮影)



図6 高山寺 明恵上人樹上坐禅像(2月21日著者撮影)

「高山寺では、石水院の廣縁から、向ひの山の姿をながめるのが、千重子は好きであつた。開祖、明恵上人の樹上座禪の肖像畫も好きであつた。床の脇に、「鳥獸戲畫」の繪卷の複製が、ひろげてあつた。」 『古都』



様々な作品で明恵に触れている川端は『古都』の中でも、明恵を開祖とする高山寺を舞台としている。「若い娘らしくない」場所を好む千重子が訪れた土地が、石水院だったのは何故だろうか。吹雪に近い天候のためか、拝観者はおらず、千重子と同じように広縁から向かいの山が眺められた。風の音だけが聴こえるといった静謐さで、時折樹上座禪の肖像画や鳥獸戲画を鑑賞するのに堅苦しさがなく、捨子であるという生い立ちに思い巡らす千重子に安らぎを与えるような空間であった。

図7 高山寺 鳥獸人物戯画(2月21日著者撮影)

5 高山寺の開祖である明恵に関して、川端は『たまゆら』、『古都』、『いつも話す人』、『故園』、『マイヨオルのレダ』、『月下の門』、『新春随想』、『茨木市で』、『美しい日本の私』、『ほろびぬ美』、『独影自命』11 作品で記している。(原善等「川端康成全集固有名詞索引 X 日本文学(古典一人名)篇」、『上武大学経営情報学部紀要』23、2000.9)

■ 『美しさと哀しみと』(1961) : 化野念仏寺⁶



図8 あだし野念仏寺パンフレットより



図9 あだし野念仏寺入口(2月22日著者撮影)

**「無縁佛の墓じるしと言われる小さい古びた石塔が、
数知れずならんで、無常感のただよふ西院の河原」
『美しさと哀しみと』**

作品冒頭、主人公・大木が「渡月橋のほとりで車を拾ふと、大木は仇し野まで行ってみるつもり」だったが、「祇王寺の入口の竹林の小暗さを見ると、そこから車をかへしてしまつた」場所である。しかし、1965年2月28日封切の映画『美しさと哀しみと』⁷の前半では、大木が化野念仏寺と思われる場所で無縁仏を見つめるシーンが挿入されている。この差異は大木が過去の自分をどう捉えているかといった点で物語を大きく揺るがすことになるが、原作では結局のところ、化野念仏寺へお参りすることはなかった。ここでは、映画ではどの位置から捉えられていたのか、また『古都』での言及もあるが、今回は『美しさと哀しみと』において取り上げられた意味を探ることとする。

この化野念仏寺は付近のバス停から数分の距離のところであり、そこまでは作られた近道へ降り、民家に囲まれた通りを抜けると到着する。映画のシーンは西院の河原内で行なわれたと見られ、今回の旅行では同じ山を背景にした石仏たちの姿を発見することが出来た。

作品内で音子が20歳になった時、母と「仇し野念仏寺」で将来について語り合っている場面がある。西院の河原に並ぶ無数の無縁仏は寂しく、小さく寄り添いあい、音子の哀しみをより深める。それでも本来の表記とは異なる「仇(あだ)が誰を指しているのか、音子は答えを出してくれない。

⁶ 図8は西院の河原であるが、境内では撮影禁止の場所であった。図9は入り口付近の地蔵である。

⁷ この映画はキネマ旬報1965年度ベストテンには入らず、16位に終わっており、批評家らのコメントも皆無に近い。(『キネマ旬報』1966年2月決算特別号、27頁参照)しかし、川端は三島由紀夫への書簡で映画や主演者について触れるなど、関心を寄せていたようである。(志村三代子「川端康成原作映画辞典」、坂井セシルほか編『川端スタディーズ 21世紀に読み継ぐために』笠間書院、2016.12、249頁参照)

■ 『虹いくたび』(1950) : 大徳寺⁸、桂離宮

大徳寺聚光院で水原が和尚らと会話している場面、また昔の恋人・菊枝と再会する場面がある。この構図を確認するとともに、聚光院全体を見学する。また併せて、ここを舞台とした意味を考えていきたい。



「大徳寺の塔頭、聚光院の玄関に、水原が立つと、黒い犬が二頭、人より先きに奥から出て来た。」

『虹いくたび』

図 10 大徳寺 聚光院入口(2月 21日著者撮影)

大徳寺聚光院は 2016 年 3 月 1 日～2017 年 3 月 26 日まで期間限定公開がなされていた。千利休が一族の菩提寺とした寺院で、入ると彼の植えた木のある素朴な色味を持った庭園がある。『虹いくたび』では「利休の切腹の間を移したと言ひ伝える、三疊の茶室にはいつた。」と説明がされる閑隠席で、菊枝が「このお席に、あんさんと二人きりやなんて、こはいことどす。死んでもええやうなもんどす。」と話す。そして庭の右手の沙羅双樹の木を見上げ、「お釋迦さんが入滅なさつた時に……」と続けるが、二人で会話していく内、水原は菊枝に何の魅力も感じないことに気付き、「死んだ妻が水原のうちにまざまざと生きて来」る。このように、聚光院を舞台とした場面では登場人物達に様々な死がつきまとう。

また、老師が水原との会話の中で、子供がボオル遊び等で寺を荒らすために「大徳寺の建築も、戦争このかた、老人の齒のように、ほうぼうがたがたぶらぶらで、これでもう十年たちますと、見る影もなくなるでござせうよ。」と憂えている場面があるが、現在は観光地化され、子どもの声がするのは玉林院内にある大徳寺保育園の付近のみである。修繕も加えられているのだろう、綺麗な姿を保っている。ここで注目したいのが、「自動車も山内にぶうぶうはいつて来ます。坊主も便利で、寺に乗りつける。總門の下に横木があつて、車は通れんやうになつてたものが、今はその木をどけましたわ。」といった世俗化した現状を語る老師

⁸ 川端が大徳寺を訪れたのはペンクラブ活動後の 1950 年 4 月 27 日である。また翌日の 28 日は、桂離宮を見学している。(川端康成「川端康成一秀子・麻紗子往復書信」『川端康成全集 補巻 2』新潮社、1984.5、532~534 頁参照)

の言葉である。もちろん事実は定かではないが、大徳寺を訪れた際、現在でも各々の院の入り口や付近に車が駐車してあったことから、川端は美しい姿だけでなく、既に変化しつつある京都をも描いていることがわかる。



図 11 桂離宮 蘇鉄(2月 25 日著者撮影)



図 12 桂離宮 外腰掛(2月 25 日著者撮影)

「ここに十本あまりも蘇鉄があるのは、いかにも思ひがけないが、日本の木がしげる木蔭にあつて、この熱帯樹が植木じみた姿になり、茶室へ行く路地に、程よいおどろきを與へてゐると見られないことはない。」

『虹いくたび』

続けて、桂離宮内での麻子と夏二の位置確認、その中でも重要な会話がなされる場に焦点を当てていく。「拜観人は御幸御門の右手の通用門からはいる。」とあるように、現在でも参観者用出入口となっている門から入り、麻子と夏二同様、休所で案内時間になるのを待つ。庭の敷石や飛石の保護のために「戦争前よりも、ずっと楽に拜観がゆるされる今でも、一日の人数を制限してゐるんだらう」と語られているが、2016年6月から当日申込みも開始され、拜観者の人数は増している様子だ。

そこから二人は進んでゆき、蘇鉄が真正面に植えられている外腰掛に腰をかける。二人にとって、ここでの会話は麻子の姉・百子と夏二の兄・啓太を巡る重要なものである。しかし、ここは座ると草林に囲まれ、桂離宮の中でも格別素晴らしい景色とは言い難く、蘇鉄だけが存在感を強調してくる。ここから、川端は美しい建築や景色を舞台するために桂離宮を選択したわけではないことが理解される。驚きを与える蘇鉄に対し、「島津家の献上ですつて。」と付け加えたり、「さつきの雲雀が聞えますわ。」と過去と現在を繋げたりする麻子に、夏二は物事の背後に何かを見ようとする姿勢を揶揄する。その言葉は、自分から兄を思い出されることを嫌がることにも関係しているが、川端の「知識も理屈もなく、私はただ見てゐる」⁹とする眼差しとも類似してくるだろう。

⁹ 川端康成「美の美 埴輪 女の首」(『日本経済新聞』1970年5月7日付朝刊)



図 13 桂離宮(2月25日著者撮影)



図 14 桂離宮 HP¹⁰より

**「天の橋立とか道濱とか言はれる小石敷が、池のなかへ長く突き出てゐた。
その鼻に小燈籠が立つて、池の向うは松琴亭である。」**

『虹いくたび』

図 13 の左手に見えるのが松琴亭だが、2017年2月現在は工事中であった。図 14 は工事前の松琴亭である。工事の関係で、池の量も少ないという。また、1976年7月~1982年3月にかけても大修理が行なわれており、川端の見た風景とは些か異なっている点があることは否めない。

¹⁰ 桂離宮(<http://www.kunaicho.go.jp/about/shisetsu/kyoto/katsura-ph.html>)参照



図 15 青蓮院・手前の楠(2月23日著者撮影)

「お父さん、あのへんをお歩きやすなら、青蓮院のところを、ちよつとだけ、通つてついでにだけしまへんやろか。」と千重子は車のなかで頼んだ。「ほんの入り口の前だけ……。」「楠やな。楠が見たいのやろ。」「さうやの。」千重子は、父の察しのいいのにおどろいた。「楠どす。」……青蓮院の入り口の、石がきの上の楠は、楠だけが、四本ならんである。なかでも、手前のが、もつとも老木であるらしい。千重子たち三人は、その楠の前に立つて、ながめて、なんとも言はなかつた。じいつと、ながめてみると、大楠の枝の、ふしぎな曲り方に、のびひろがり、そして、交はつた姿には、なにか不気味な力がこもつてゐるやうでもある。」

『古都』

『古都』だけでなく、青蓮院の楠に関しては、東山魁夷の『京洛四季』序文「都のすがた一とどめおかまし(東山魁夷の世界)」の中においても触れられ、「莊嚴、魁偉である。ばかりでなく、優雅、妖艶である。」¹¹と形容されている。こうした畏れを感じさせる楠が『古都』に描かれるなかで、どういった役割を果たしたのかを考察していきたい。

青蓮院付近まで来ると図 15 の大楠がすぐさま目に飛び込む。木の下から覗き込むようにして立つと、千重子らを感じたように不気味な、落ち着いた心持がするほどに枝が伸びている。『古都』では、この楠を見に行くまでに父の太吉郎と千重子、母のしげの三人が車の中で思い出話をしている場面がある。千重子は青蓮院内での接待や解説に対して風情のなさを指摘したり、祇園の舞子を批判したりと、彼女らしくない毒々しい発言を繰り返す。そして不穏な雰囲気のまま、三人は青蓮院の楠の前に立つて、「ながめて、なんとも言はなかつた」。「千重子が、どうして、楠を見たいと思ひついたのか。」、ねじれた枝が苗子との出会いに心乱される千重子の心情を表すようであり、彼女とこの物語が不吉な方向へと進み始めたことを暗示する

¹¹ 川端康成「都のすがた一とどめおかまし」『川端康成全集 第28巻』新潮社、1982.2、513頁

ようでもあった。

■ 『日も月も』 (1952) : 光悦寺



図 16 光悦寺 入口(2月24日著者撮影)

「光悦寺の入口の前には、茶會がへりの人たちが、田舎風な家の軒下に、かたまつて立つてゐた。……茶室は前の客がはいつてゐるので、朝井は松の木蔭に待ちながら、裏手の山を振り向いたが、「おや。禿山になつてゐる。戦争で伐つてしまつたのかな。」と、氣がついて言つた。」

『日も月も』



図 17 光悦垣(2月24日著者撮影)

『日も月も』は京都と鎌倉が舞台となっており、京都が登場するのは冒頭と終盤のみである。冒頭、父・朝井と娘・松子が光悦寺で行なわれる光悦會に向かう場面、そして終盤に翌年松子と幸二が再び光悦會に向かう場面で取り上げられている。光悦寺を舞台とした、同じ場面が繰り返されていることで描かれたものとは何か、また松子の二人の兄が戦争で亡くなっていることから今回のテーマである「戦後の京都」との関連を導き出していきたい。

今回光悦寺を訪れた際には全ての茶室が立ち入り禁止となっており、外観のみの調査となった。川端は「山の見えぬ京の町」¹²を悲しんでいたりと、『古都』では高山寺から向かいの山を眺める場面を描いたり、山への愛着を見せていたが、ここでも奥へ入ると鷹ヶ峰、鷲ヶ峰、天ヶ峰の並んだ雄大な姿が眺められた。

『日も月も』冒頭と終盤の場面では主に松子が語り手となって物語が進んでいき、別れた恋人の弟である幸二に焦点が当てられるが、全体としては二人が自分の思うままに発言・行動する場面が極めて少ない。宿命にも似た不運な出来事の連続は松子の兄の亡くなった原因である戦争のように不条理で、抗いがたく、松子を苦しめる。周囲の人間に翻弄され、行きつく先で松子は再び光悦寺へと出向く。そこで松子は父と泊まった部屋に幸二と泊まることになるのだが、二人は結ばれないままに物語が閉じてしまう。亡くなった父の存在、幸二の兄の存在といった過去の記憶が現在の二人を縛り、読み手にさえ幸福な夢を見せようとしな

■浦上玉堂の墓¹³：本能寺



川端は「玉堂は「東雲」と書いてみて、私は意味に迷ったが、博物館に出品して、「凍雲」とであると知った。私はこの繪を前に圖録で見た時から好きで、……所藏者の家を訪ねたが、見せてもらへなかつた。ところが、廣島、長崎へ原子爆弾の視察に行つた歸りに京都へ寄ると、この繪が買へさうな話を耳にした。私はさつそく玉堂の墓に参つた。……「凍雲篩雪図」が手にはいる前後も、私は京の宿を出るたびに玉堂の墓に参つた。」¹⁴と、戦後幾度か本能寺にある玉堂の墓に参っていた。商店街の喧騒を離れ、本能寺の奥にひっそりと建てられている現在では、付近の立札に川端康成が「凍雲篩雪図」を所有していることが記されている。

図 18 本能寺 浦上玉堂の墓(2月22日著者撮影)

¹² 川端康成「都のすがた一とどめおかまし」『川端康成全集 第28巻』新潮社、1982.2、515頁

¹³ 川端は1949年12月に浦上玉堂の墓を訪れており、『哀愁』や『花は眠らない』等の随筆で玉堂について触れている。

¹⁴ 川端康成「月下の門」『川端康成全集 第27巻』新潮社、1982.3、468頁

■京都大学吉田南総合図書館での『京都新聞』調査

訪問日	
1949年12月6日	本能寺と嵯峨へ玉堂調べ（～17日）
1950年4月13日	京都を寄り、広島・長崎へ(ペンクラブ代表19名、石川達三・原民喜等と共に)
1950年5月4日	浦上玉堂「凍雲篩雪図」入手
1953年6月20日	里見の宗達の絵を見に訪れる
1957年9月7日	<国際ペン東京大会開会の辞>(新潮10月号に掲載) 一行が京都へ着き、夜は裏千家の茶会。
1957年9月8日	嵯峨の天龍寺で閉会式。正午から京都府・市、商工会議所合同主催レセプション。 夜は南禅寺の野村別邸で京都市主催お月見ガーデンパーティへ。
1957年9月10日	<雨のち晴れ—国際ペン大会を終わつて>(朝日新聞に掲載)

ここでは、『京都新聞』から川端が京都を訪問した際に寄せたコメント、特集記事について調査を行なった。1949年12月1日～10日、16日～18日分では川端どころか、新聞小説以外の文学に関する記事がほぼ存在せず、戦争関連の記事が多く見受けられた。1950年4月12、14日、5月3～5日には情報がなく、1957年9月6日日刊には「京で日本の美を・・・期待する世界のペンマン」、「”日本の作家は孤独”東西文学の影響で熱論」と題された記事が掲載されているが、川端個人の意見は取り上げられていない。両者ともフランスやチェコ等、外国からの意見に注目が集まっている。¹⁵9月7日～11日分はペンクラブ関連の記事は存在したものの、同じく川端によるコメントは掲載されていない。そもそも全体として、文学者個人に関する記事がないに等しく、ここから川端個人への関心度を測ることは困難であった。

今回の調査はマイクロフィルムで行なったが、パソコンの接続の関係で1時間以上スキャン出来ず、1960年代の調査の時間が不足してしまった。こうした事態も想定し、文献調査の場合は半日を費やすか、予備日を設ける必要があったと省みられる。

■龍谷大学大宮図書館での『川端文学への視界』1~28年号調査

(調査資料の一部)

- ①早坂暁・原善「早坂暁版映像「古都」をめぐって」(『川端文学への視界 20』銀の鈴社、2006.2、8頁)
- ②田村充正「映像化された「古都」——映画「古都」二作品——」(同上、34頁)

当図書館では『川端文学への視界』の京都関連論文の調査を行なった。『古都』に注目して2点挙げると①では1988年の特別番組のために映像化された『古都』の脚本を担当した早坂暁との対談がまとめられ、②の論文では中山登監督による1963年版、市川崑監督による1980年版の映画『古都』が比較分析されている。『古都』は映画、ドラマ等で繰り返し映像化されており、今後制作された年の時代背景とともに主演女優の演技に焦点を当てて考察していくことも可能であろう。

¹⁵ 海外から見た日本に関しては、1950年4月13日に「惰眠をむさぼる観光京都建設」という記事が見られ、「戦前から国内はもとより”キョウト”の名は外からも親しまれていた」とあるように、京都の観光化は戦後既に始まっていたようだ。川端は1958年「京都を世界の寶として、今よりもさらに外国からの観光客が群れ満ちるころ、京都の町は京都らしさを損じ、あるいは失つてゐないだらうか。」(川端康成「自慢十話」『川端康成全集 第28巻』新潮社、1982.2、169頁)と、進む京都の観光地化に危惧の念を抱いている。

■同志社大学図書館での『映画往来』（全集未収録の「映画的批評眼を」）調査

「川端が京都に滞在したのはこの撮影『『狂った一頁』の映画撮影』のときが初めて」〔カッコ内は引用者による〕（河野仁昭『川端康成 内なる古都』京都新聞出版センター、1995.05、12頁）であり、1927年5月末に改造社の円本宣伝のために京都を訪れた際にはまず衣笠貞之助監督宅へ向かっていることから、「京都との出会いは映画を介してだった」（同上、13頁）という指摘もされている。そうした経緯から、京都と川端の出会いに関連する映画資料の調査を行なうに至った。直接的に京都作品と関連しない資料ではあるが、京都が日本映画発祥の地である¹⁶ということ、川端の京都を舞台とした作品が多く映画化されているということからも調査の必要があると判断された。

川端は『映画往来』1930年5月の特集「頻々たる文芸作品の映画化に就いての感想」に「映画的批評眼を」という文章を寄せている。『浅草紅団』の映画化に触れ、「筋も、人物も、何もかも、まるで原作とちがったものでいい。脚色者自身の「浅草紅団」を書いて下さい」と述べている。そうした文芸映画に対する批評は一貫しており、「作者の辯——「三人姉妹」の原作者として——」においても「私は原作者としての意見や註文を、なにか一つ出したことがない」¹⁷とあくまでも映画は映画であり、原作への忠実さは求めているようである。『恋の花咲く 伊豆の踊り子』（1933）の監督である五所平之助とは異なる考え方¹⁸だ。今回の資料調査では川端の文芸映画に対する姿勢を再確認することができ、川端原作の映画は原作者が何も言わない分、映画会社、制作側の創意工夫が大きく反映されていることが明らかになった。

■終わりに

川端が画家である東山魁夷に向けて「京都を今描いといっていたかなくなくなります。京都のあるうちに描いておいて下さい」¹⁹と話したということから、同時期京都を舞台とした小説を書き始めた川端は京都の美しさを描いたと思い込んでいた。しかし、実際に舞台となった寺社を巡り、小説を読み返す内に、川端は既に京都の美しさの影を読み取っていると気づかされた。ペンクラブ活動後に多く京都を訪れた川端は、恐らく広島や長崎といった街の背後に潜む「戦争」という巨大な存在に耐えかね、『虹いくたび』の夏二のように、過去を呼び戻さなくとも良い風景と出会いたかったのだ。今回訪れた作品の舞台となった寺社は観光客の多い京都の中でも山林付近にある閑寂な空間であった。そこは、川端のコレクションにある埴輪 乙女頭部や聖徳太子立像といった素朴に心を寄せるようなものに近く、あまりにも人間とは遠い。その一方で千重子のように、平穏であるかに見える京都の街並みを愛でるほど、川端は作品内で絶えず人々の心の内に生々しい戦争の痕跡を見出し²⁰、描いてしまう。直接戦争という言葉は使用されないものの、作品群では常に個々の生命、存在が強く問われる。俗的な人物達が「美しい」風景と対照的に描かれるほど、先の戦争がいかに人々の心を荒ませていったのかが浮き彫りにされるのだ。そして川端が「京都に移り住んでしまへば、京都の京都らしさの壊れてゆくを見て、なげき、かなしみ、苦痛ばかりかもしれない。」²¹と嘆くのは、

¹⁶ 貴田庄『志賀直哉、映画に行く エジソンから小津安二郎まで見た男』（朝日新聞出版、2015.2、26頁参照）

¹⁷ 川端康成「作者の辯——「三人姉妹」の原作者として——」『川端康成全集 33』新潮社、1982.5、111頁

¹⁸ 五所は高見順らとの座談会で「川端さんにお目にかかった時分から、文學作家との協力において仕事が出来ると言うことを望んでいたわけなんです。ところがなかなか行なわれないんですね」と主張している。（河盛好蔵他「映画にのぞむ(座談会)」、『文藝』10、1953.6、53頁）

¹⁹ 川端康成「都のすがた—とどめおかまし」『川端康成全集 第28巻』新潮社、1982.2、511頁

²⁰ 『虹いくたび』では「僕は建築屋として、広島、長崎の惨害も見てきましたが、その目で京都を見ると、街を歩いてみても、ぞうつとしますね。あの一方口の路地づくりなんか、原子爆弾には、おそろしいことになりませうね。」（川端康成「虹いくたび」『川端康成全集 第11巻』新潮社、1981.11、211頁）と語らせている。

²¹ 川端康成「古都」『川端康成全集 28』新潮社、1982.2、188頁

そこに生きる人間そのものへの哀しみでもある。川端が戦後発見した京都は痛ましい現実、人々から離れるようでありながら、なお強く向き合わざるおえない場所であった。

当初、川端康成と京都関連作品を巡る問題を考える際に重要である北山杉を訪れる予定であった。しかし、京都北山丸太生産協同組合に問い合わせたところ、現在では北山杉資料館は5~6年前に閉館となり、付近に設置されていた川端康成文学碑や『古都』の像も撤去されているとのことで断念した。2016年には『古都』が3度目の映画化となり、今後京都がどのように描かれているのか、受容されるのかといった再検討が必要となる。また、その他京都を舞台とした作品では美術品が重要な位置を占めていることから、新たに発見され続けている川端の所蔵コレクションと併せた研究も課題となってくるであろう。²²

今回の研究旅行に際し、協力して下さった大阪府立茨城高等学校の岡崎守夫氏、本管克江氏、そして尚絅大学の宮崎尚子氏、撮影・写真使用を許可して下さった高山寺をはじめとした寺社の方々に感謝の気持ちと御礼を申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。

※作品からの引用は全て新潮社『川端康成全集』（1981~1984）に拠るものである。

■参考文献

- ・小谷野敦・深澤晴美編『川端康成詳細年譜』（勉誠出版、2016.8）
- ・平山三男編『今、ふたたびの京都—東山魁夷を訪ね、川端康成に触れる旅』（求龍堂、2006.9）

²² 加えて2015年10月31日~12月6日、宮崎県立美術館にて行われた「川端康成の眼 ~川端コレクションと東山魁夷~」、2017年4月1日~5月21日、久留米市美術館にて行われた「川端康成 美と文学の森」と2度実物を鑑賞する機会に恵まれたことから、そこからのみ得られる洞察・作品解釈を試みたい。